

てぶくろ か 手袋を買いに

にいみなんきち
新美南吉



さむ ふゆ ほっぼう きつね おやこ す もり き
寒い冬が北方から、狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。

あるあきほらあな こども きつね で
或朝洞穴から子供の狐が出ようとしたのですが、

「あっ」と叫んで眼を抑えながら母さん狐のところへころげて来ました。

「母ちゃん、眼に何か刺さった、ぬいて頂戴早く早く」と言いました。

かあ きつね
母さん狐がびっくりして、あわてふためきながら、眼を抑えている子供のて

を恐る恐るとりのけて見ましたが、何も刺さってはいませんでした。母さん狐

は洞穴の入口から外へ出て始めてわけが解りました。昨夜のうちに、真白な雪が

どっさり降ったのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照っていたので、

雪は眩しいほど反射していたのです。雪を知らなかった子供の狐は、あまり強

い反射をうけたので、眼に何か刺さったと思ったのです。

子供の狐は遊びに行きました。真綿のように柔らかい雪の上を駆け廻ると、雪

の粉が、しぶきのように飛び散って小さい虹がすっと映るのです。

すると突然、うしろで、

「どたどた、ざーっ」と物凄^{ものすご}い音^{おと}がして、パン粉^このような粉雪^{こなゆき}が、ふわーっと子^こ狐^{ぎつね}におっかぶさ^きって来^きました。子^こ狐^{ぎつね}はびっくりして、雪^{ゆき}の中^{なか}にころがるようにして十^{じゅうめーと}米^むも向^むこうへ逃^にげました。何^{なん}だろうと思^{おも}ってふり返^{かえ}って見^みましたが何^{なに}もい^いませんでした。それ^{それ}は縦^{もみ}の枝^{えだ}から雪^{ゆき}がなだれ落^おちたのでした。まだ枝^{えだ}と枝^{えだ}の間^{あいだ}から白^{しろ}い絹糸^{きぬいと}のように雪^{ゆき}がこぼれていました。

まもなく洞^{ほら}穴^{あな}へ帰^{かえ}って来^きた子^こ狐^{ぎつね}は、

「お母^{かあ}ちゃん、お手^て々^てが冷^{つめ}たい、お手^て々^てがちんちんする」と言^いって、濡^ぬれて牡^{ぼたん}丹^{いろ}色^{いろ}にな^なった両^{りょう}手^てを母^{かあ}さん狐^{ぎつね}の前^{まえ}にさしだしました。母^{かあ}さん狐^{ぎつね}は、その手^てに、は——と息^{いき}をふっかけて、ぬくとい母^{かあ}さんの手^てでやんわり包^{つつ}んでやりながら、
「もうすぐ暖^{あたたか}くなるよ、雪^{ゆき}をさわると、すぐ暖^{あたたか}くなるもんだよ」とい^いましたが、かあ^{かあ}い坊^{ぼう}やの手^てに霜^{しも}焼^{やけ}ができてはか^かわいそうだから、夜^{よる}にな^なったら、町^{まち}まで行^いって、坊^{ぼう}やのお手^て々^てにあ^あうよう^{よう}な毛^{けい}糸^{いと}の手^て袋^{ぶくろ}を^か買^かってや^おろうと思^{おも}いました。

た。
暗^{くら}い暗^{くら}い夜^{よる}が風^{ふう}呂^ろ敷^{しき}のよう^{よう}な影^{かげ}をひろ^ひろ^ろげ^げて野^の原^{はら}や森^{もり}を包^{つつ}みにや^きって来^きました
が、雪^{ゆき}はあ^あま^まり白^{しろ}いので、包^{つつ}んでも包^{つつ}んでも白^{しろ}く浮^{うか}びあ^あが^がって^ていま^ました。

親^{おや}子^この銀^{ぎん}狐^{ぎつね}は洞^{ほら}穴^{あな}から出^でました。子^こ供^{ども}の方^{ほう}は母^{かあ}さんのお腹^{なか}の下^{した}へは^はい^いりこ
んで、そこ^{そこ}からま^めん^めまる^{まる}な眼^めをぱ^ぱち^ちぱ^ぱち^ちさせ^{させ}なが^{なが}ら、あ^あち^ちやこ^こち^ちを^み見^みなが^{なが}ら
あ^ある^る歩^いいて^い行^いき^きま^ました。

やがて、行手にぼつりあかりが一つ見え始めました。それを子供の狐が見つけて、

「母ちゃん、お星さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ」とききました。

「あれはお星さまじゃないのよ」と言って、その時母さん狐の足はすくんでしまいました。

「あれは町の灯なんだよ」

その町の灯を見た時、母さん狐は、ある時町へお友達と出かけて行って、とんだめにあったことを思出しました。およしなさいっていうのもきかないで、お友達の狐が、或る家の家鴨を盗もうとしたので、お百姓に見つかって、さんざお追いまくられて、命からがら逃げたことでした。

「母ちゃん何してんの、早く行こうよ」と子供の狐がお腹の下から言うのですが、母さん狐はどうしても足がすすまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。

「坊やお手々を片方お出し」とお母さん狐がいました。その手を、母さん狐はしばらく握っている間に、可愛い人間の子供の手にしてしまいました。坊やの狐はその手をひろげたり握ったり、抓って見たり、嗅いで見たりしました。

「何だか変だな母ちゃん、これなあに？」と言って、雪あかりに、またその、人間の手に変えられてしまった自分の手をしげしげと見つめました。

「それは人間のて手よ。いいかいぼうや、まちへ行ったらね、たくさん人間のいえ家があるからね、まずおもてまる表に円いシャッポのかんばん看板のかかっているいえさが家を探すんだよ。それがみつかったらね、トントンと戸をたたいて、こんばんはって言うんだよ。そうするとね、なかから人間のて手と、すこうし戸をあけるからね、その戸のすきま隙間から、こっちのて手、ほらこの人間のて手をさし入れてね、このて手にちょうどいいてぶくろちょうだい手袋頂戴って言うんだよ、わかったね、けっして、こっちのおてて々を出しちゃ駄目よ」とかあ母さんぎつね狐は言いきかせました。

「どうして？」とぼうやのぎつね狐はききかえしました。

「人間のて手、あいてぎつね狐だとわかると、てぶくろ手袋をうって売ってくれないんだよ、それどころか、つかまえておりなかへ入れちゃうんだよ、人間のて手、こわってほんとに怖いものなんだよ」

「ふーん」

「けっして、こっちのて手を出しちゃいけないよ、こっちの方、ほら人間のて手の方をさしだすんだよ」といって、かあ母さんのぎつね狐は、もって来たふたつのはくどうか白銅貨を、人間のて手の方へにぎ握らせてやりました。

こどもぎつね狐は、まちのひめ町の灯を自あてに、ゆきの雪あかりののほら野原をよちよちやって行きました。はじめのうちはひとりだった灯が二つになり三つになり、はては十にもふえました。ぎつね狐の子供はそれを見て、ひには、ほし星とおなじように、あかの赤いのやきの黄いのやあお青いのあるんだなと思いました。やがてまちにはいりましたがとおりの家々とも

うみんなと戸を閉めてしまって、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落ちて
いるばかりでした。

けれど表の看板の上には大てい小さな電燈がともっていましたので、狐の
子は、それを見ながら、帽子屋を探して行きました。自転車の看板や、眼鏡の看板
やその他いろいろな看板が、あるものは、新しいペンキで画かれ、或るものは、
古い壁のようにはげていましたが、町に始めて出て来た子狐にはそれらのもの
がいったい何であるかわからないのでした。

とうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大
きなシルクハットの帽子の看板が、青い電燈に照されてかかっていました。

子狐は教えられた通り、トントンと戸を叩きました。

「今晚は」

すると、中では何かことこと音がしていましたがやがて、戸が一寸ほどゴロリ
とあいて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を、
——お母さまが出しちゃいけないと言ってよく聞かせた方の手をすきまからさ
しこんでしまいました。

「このお手々にちょうどいい手袋下さい」

すると帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋を

くれと言うのです。これはきっと木の葉で買いに来たんだなと思いました。

そこで、

「先にお金を下さい」と言いました。子狐はすなおに、握って来た白銅貨を二

つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差指のさきにつけて、

カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、

ほんのお金だと思いましたので、棚から子供用の毛糸の手袋をとり出して来

て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を

帰り始めました。

「お母さんは、人間は恐ろしいものだって仰有ったがちっとも恐ろしくないや。

だって僕の手を見てもどうもしなかったもの」と思いました。けれど子狐は

いったい人間なんてどんなものか見たいと思いました。

ある窓の下を通りかかると、人間の声がしていました。何というやさしい、

何という美しい、何と言うおっとりした声なんでしょう。

「ねむれ ねむれ

母の胸に、

ねむれ ねむれ

母の手に――」

こぎつねはそのうたごえは、きっとにんげんのおあさんのこえにちがいないとおも

だって、こぎつねねむときにも、やっぱりおあさんぎつねは、あんなやさしいこえでゆすぶってくれるからです。

するとこんどは、こどもこえがしました。

「おあちゃん、こんなさむよるは、もりこぎつねさむさむな啼いてるでしょうね」

するとおあさんのこえが、

「森のこぎつねおあさんぎつねのおうたをきいて、ほらあななかねむ

ようね。さあぼうやもはや早くねんねしなさい。もりこぎつねぼうやとどっちが早くねんねするか、きっとぼうやの方が早くねんねしますよ」

それをきくとこぎつねきゆうにおあさんがこいしくなって、おあさんぎつねま待つてい

るほうへとんでいきました。
おあさんぎつねは、しんぱいしながら、ぼうやのぎつねかえくを、いまいまえながらま待つていましたので、ぼうやが来ると、あたたかむねだきしめて泣きたいほどよろこびました。

にひきぎつねもりほうかえいつきでぎつねけぎんいろ

光り、そのあしあとには、コバルトのかげがたまりました。

「おあちゃん、にんげんこわ

「どうして？」

「坊、間違えてほんとうのお手々出しちゃったの。でも帽子屋さん、掴まえやし
なかったもの。ちゃんとこない暖い手袋くれたもの」
と言って手袋のはまった両手をパンパンやってみせました。お母さん狐は、
「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに
人間はいいものかしら」とつぶやきました。

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日第1刷発行

1997（平成9）年7月15日第2刷発行

入力：大野晋

校正：伊藤祥

1999年3月2日公開

2011年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。